

# ブルキナファソへの野球の普及活動と 元青年海外協力隊員の自己実現

千葉 直樹

## Diffusion of Baseball into Burkina Faso and the Self-Realisation of a former member of the Japan Overseas Cooperation Volunteers

Naoki Chiba

### Abstract

This study focuses on the experiences of Deai Yuta who taught baseball to children in Burkina Faso as a former member of the Japan Overseas Cooperation Volunteers (JOCV) from 2008 to 2010. After finishing his work with the JOCV, he continued to support them in order that Burkinian players could sign contracts with professional teams in Japan. The aim of this study is to clarify 1) the process of diffusion of baseball into Burkina Faso, 2) analysis of examples where players participated in tryouts to become a professional player with the Kochi Fighting Dogs franchise which belongs to the Independent Baseball League of Shikoku, and 3) examination of the differences of baseball culture between Japan and Burkina Faso. The data is based on four hours of interviews with Deai Yuta between November, 2014 and March, 2016.

Baseball was expanded into Burkina Faso from the Republic of Mali in 1999. The Burkina Faso Baseball Federation was founded and it entered into the International Baseball Federation in 2004. As of 2014 the number of baseball players was 400 distributed amongst 20 teams. Interviews revealed that Deai chose to support Burkinian players, because they had aspirations to become professionals in Japan. As a result, he achieved his self-realisation of supporting Burkinian players through his experiences of the JOCV. He learned about key differences in the culture of baseball between Japan and Burkina Faso. While Japanese baseball is controlled by coaches through a hierarchical structure and the use of hand signals, Burkina baseball is aggressive and spontaneous for players. Overall, he compared and contrasted the relationship between differences in baseball culture and the broader way of life in the two countries through his experiences of the JOCV in Burkina Faso.

**Key words** : Baseball, Burkina Faso, the Japan Overseas Cooperation Volunteers (JOCV), Sport for Development and Peace

### I. はじめに

ブルキナファソ出身のサンホ・ラシーナは、2015年8月に独立リーグ四国アイランドリーグの高知ファイティングドックスとプロ契約を結んだ。西アフリカの最貧国

から来た青年はなぜ、日本でプロ野球選手を目指すことになったのだろうか。本研究では、青年海外協力隊員として2008年からブルキナファソで野球の指導を行った、出合祐太<sup>1)</sup>氏へのインタビュー調査を通して、発展途上国へのスポーツ普及の課題と、青年海外協力隊員の自

北翔大学 生涯スポーツ学部スポーツ教育学科  
〒069-8511 北海道江別市文京台23番地

School of Lifelong Sport, Department of Sport Education, Hokusho University  
23, Bunkyo-dai, Ebetsu, Hokkaido, Japan 069-8511

著者連絡先 千葉 直樹  
naokic@hokusho-u.ac.jp

己実現について探求する。

昨今、開発と平和のためのスポーツ (Sport for Development and Peace: 以下、SDPと表記) に関する研究が頻繁に行われるようになった (小林, 2014; 岡田, 2014; 齊藤・岡田・鈴木, 2015, 鈴木, 2011; Houlihan and White, 2002)。たとえば、岡田 (2014: 6頁) は、開発とスポーツの関係を、①「スポーツの開発 (Development of Sport)」、②「スポーツと開発 (Development and Sport)」、③「スポーツを通じた開発 (Development through Sport)」の三つに分けて次のように説明している。スポーツの開発とは、「スポーツ振興やスポーツ界の発展を考えたものである」。「スポーツと開発」とは、「『スポーツ』と『開発』という単語の並びに従属性がない概念」であり、「スポーツが発展する過程において、社会に及ぼす正負の両面での影響を示したものであり、とくに自然破壊などのスポーツに関係する負のインパクトを考慮しながらどのようにスポーツを振興するかを議論するもの」である。「スポーツを通じた開発」とは、1990年代に用いられるようになった第三の概念であり、「スポーツを何らかの形で『用いる』ことによって、個人、社会、国の変化を促し、地球規模の課題の解決を目指すものである」。

日本において海外への「スポーツの開発」と「スポーツを通じた開発」の事例は、国際協力機構 (Japan International Cooperation Agency: 以下JICAと表記) が毎年派遣する青年海外協力隊などの国際ボランティア事業に見出すことができる。たとえば、保健体育の教師やスポーツ指導者が、発展途上国に原則2年を限度に滞在し、異文化でスポーツ指導を行ってきた。特に野球・ソフトボール指導員の派遣は、実績が比較的多い。1968年のエルサルバドルを皮切りに、南米、アジア、アフリカ、大洋州、東欧、中東に、2013年4月の時点で、36箇国278名の指導者を派遣してきた<sup>2)</sup>。発展途上国でスポーツ指導を行う際に、隊員はどのようなスポーツ文化の違いを経験するのだろうか。

本研究では、出合氏の経験を通して、発展途上国での「スポーツの開発」と「スポーツを通じた開発」の課題について検討する。本研究では、ブルキナファソで野球指導を行った出合氏へのインタビューを通して、1) ブルキナファソに野球が普及した過程、2) 現地の青年を日本に招致してプロテストを受験させた経緯、3) 日本とブルキナファソの間にある野球文化の違いを明らかにすることを目的にした。

## II. 研究方法

### (1) 調査方法

本研究では、出合氏と1) 2014年11月に3時間、2) 2016年3月に1時間のインタビュー調査 (面接質問法) を行った。質問内容は、出合氏の野球経験、青年海外協

力隊に参加した理由、ブルキナファソへの野球の普及過程、日本で現地の青年にプロテストを受験させた経緯、日本とブルキナファソの間にある野球文化の違い、「プロ・チャレンジプロジェクト」の今後の展望などであった。

本研究では、アメリカの社会心理学者、ハーバート・ブルーマー (1991) のシンボリック相互作用論を理論的な枠組みとして用いて、インタビュー調査を行った。シンボリック相互作用論の三つの前提は、1) 「人間は、物事が自分に対して持つ意味ののちとして、そのものごとに対して行為する」、2) 「このようなものごとの意味は、個人がその仲間と一緒に参加する社会的相互作用から導き出され、発生する」、3) 「このような意味は、個人が、自分の出会ったものごとに対処するなかで、その個人が用いる解釈の過程によってあつかわれたり、修正されたりする」(ブルーマー, 1991: 2頁)、である。つまり、ブルーマーは、人間の行動が他者との相互作用のなかで生み出されており、研究対象者にとっての行動の意味を大切にすべきであると考えていた。したがって、本研究では、研究対象者の認識や感じ方をありのままに記述するという姿勢で、インタビュー調査を行った。

## III. ブルキナファソの基本情報

ブルキナファソは、西アフリカの内陸に位置し、人口は約1693万人である。国名は、現地の言葉で「清廉潔白な人々」を意味し、約半数を占めるモシ族を中心に、60以上の民族から構成されている<sup>3)</sup>。19世紀末からフランスの植民地になり、1960年の独立後も、公用語はフランス語である。ブルキナファソは、2013年の時点で「国連開発計画の人間開発指数が187カ国中183位であり、世界で最も貧しい国の一つ<sup>4)</sup>」と呼ばれている。主要産業は農業であり、総人口の8割以上が従事している。人気スポーツはサッカーであり、野球は一般にあまり知られていなかった。

## IV. 結果及び考察

### 1-1) 出合氏の野球経験

出合氏は小学校4年生の時に友人に誘われて野球を始め、そこから中学、高校と富良野市で9年間野球を続けた。出合氏は、中学校2年生まではプロ野球選手になりたいという夢を持っていたが、3年生の頃には夢を諦めていた。高校時代の最後の大会に、怪我で自分の能力を発揮しきれず心残りがあったために、札幌六大学野球1部リーグに所属する強豪大学に進学した。大学での出合氏の競技成績について尋ねると、出合氏は次のように答えた。

… (中略) …甲子園出場校出身が10人以上いて、部

員も100人ほどはいて、自分の想像を越えるほどのレベルの高さに、5日ほどで心が折れかけた。公式戦も下級生の頃は全く出場できませんでした。親に大学に行かせてもらい、せめて一度はという気持ちで練習を重ね、大学4年時に、ついに公式戦デビューを果たしました。

以上のように、出合氏自身は、甲子園に出場しプロを目指す競技レベルではなかった。しかし、強豪大学の相対的に高い競技レベルの選手と練習するなかで、野球の指導者になるための基礎技術や経験を積むことができた。

### 1-2) ブルキナファソへの野球普及の歴史

ブルキナファソに野球が普及した経緯は、インタビューによると以下の通りである。ブルキナファソ野球連盟会長のンジャイ・イブライム氏は、1999年にブルキナファソに隣国のマリから野球を伝えた。その後、2004年にブルキナファソ野球連盟を設立し、国際野球連盟に加盟した。イブライム氏は、JICAの日本人隊員から、野球指導員を派遣するように要望を出せば、日本人の指導者を派遣してくれるかもしれないという話を聞き、JICAに派遣の要請を行った。

結果的に、2008年に出合氏が野球指導員としてブルキナファソに赴任してから、2016年3月時点で、4代目の指導員がJICAから派遣されて指導を行っていた。JICAでは、ある国に野球指導員を競技普及のために派遣する場合に、5代の隊員を10年間発展途上国に送り続ける方針をとっている。野球指導員を10年間派遣した影響や効果について検証し、その後の派遣計画を検討するようである。競技人口は、2014年の時点において400名程度で、国内に20の野球チームがあった。

出合氏は、2008年に「ブルキナファソ野球を応援する会」を設立し、ブルキナファソで指導した少年を2009年に日本に招いた。出合氏は、2013年から「プロチャレンジプロジェクト」として、現地でトライアウトを行い、プロになる可能性のある選手を北海道の富良野市に3箇月滞在させ、独立リーグのプロテスト受験の準備を支援してきた。サンホ・ラシーナ選手は、2014年から高知ファイティングドックスの練習生として2年間活動し、2015年にブルキナファソ人としてはじめて、同球団とプロ契約を結んだ。

### 1-3) ブルキナファソの青年が日本でプロ野球選手を目指す経緯

出合氏は、ブルキナファソに赴任した当初、現地の成人を対象に野球を指導していた。しかし、彼らにとって野球とは余暇の一つでしかなかった。彼らの野球に対する姿勢に疑問を抱きながら指導をしていた時に、後にプロテストを受ける少年（当時8歳から10歳）に出会い、野球を指導し、競技者として育てることに生き甲斐を見出

すようになった。

ブルキナファソの青年を日本に招いてプロテストを受験させた経緯を尋ねると、少年が日本でプロ野球選手になりたいという夢を持ち、努力していたために、プロ選手になる道を作ろうと考えたからであった。もちろん、出合氏は、ブルキナファソの少年に野球指導を行う過程において、日本の高校野球の映像を見せたり、2009年に少年を日本に招いてプロ野球などの試合を観戦させたりしていた。こうした経験を通して、ブルキナファソの少年は、日本でプロ野球選手になるという夢を持つようになった。ブルキナファソの少年にこのような夢を持たせた理由は何かと尋ねると、出合氏は次のように答えた。

彼らにはやるからには自分で決めてほしいと思いました。でも2年したら帰らないといけなく、無責任なことをしたくなくて、野球を追求してもらい、お付き合いして一緒に夢を持って死ぬまで付き合ってみたいと思える存在でした。どうすれば挑戦できるかと思えば彼らに提案しました。

出合氏にとって、ブルキナファソの少年の夢を実現する支援活動が生きがいになり、青年海外協力隊員の赴任期間が終了した後も、少年の活動を支援し続けることになった。

### 1-4) 日本とブルキナファソの間にある野球文化の違い

筆者は、2014年7月にJICA札幌で「豊かさとは何か」という学生向けのワークショップの開催を依頼し、その後に出合氏からブルキナファソでの野球指導に関する講演を聞いた。この講演で出合氏は、これまで周りの人に引っ張られて野球を続けてきたと発言した。この発言に関して、野球が好きで主体的に続けてきた訳ではなかったのか、とインタビューにおいて質問をすると、氏は次のように答えた。

現在振り返るとそうだと思う。自分は自分の意思で野球への道を選んだと当時は思っていた。ブルキナファソの子どもたちをみて、日本の野球人たちとの違いを感じた。自分のやっていた野球はプログラムされた環境の中で野球をやっている、そこには自分の思想とか、考え方などは入ってなく、そこにどなたかの指導が入っていて、そこには自分のオリジナリティはないので、どこか窮屈な野球があったが、学生の当時は気付かなかった。…(中略)…日本野球ではサインプレーが多いから、一つの失敗からチームも自分も一気に崩れてしまう。ブルキナファソにはこのような重たくなる空気もサインもなかった。人によるが、見方次第では勝手な野球と思う人もいるかもしれない。しかし、ミスをしても次に引きずらず、周りもミスに対して何も文句を言わ

ず、失敗してもアグレッシブにトライしていく野球だった。

出合氏はブルキナファソでの異文化経験を通して、自分の野球観について相対的に見つめ直すことができた。またブルキナファソの選手は、日本人のように強制的に練習をやらせようと思っても意欲を持たせることが難しく、選手1人1人に目標を持たせ、個別練習をすることで技術の向上を目指した。

さらに、ブルキナファソの青年は、現地での練習の最後に、グラウンドに一列に並び日本語で「ありがとうございました」とお辞儀をする習慣を自発的に取り入れていた。この習慣は、出合氏が指示したことでなく、青年たちが日本の高校野球などの練習を観察し、真似するようになったそうである。このような事例から、ブルキナファソの青年が日本野球への憧れを抱き、日本でプロを目指すようになったことがうかがえる。

#### 1-5) 今後の展望

出合氏は、2016年6月から「西アフリカベースボールプロジェクト」として、8名のブルキナファソ人、2名のコートジボアール人、2名のガーナ人を北海道に招き、道内の高校、大学、日本ハムファイターズのOBチームとの親善試合を行うために、クラウドファンディングのREADYFOR?で渡航費などを集めた<sup>5)</sup>。

今後、出合氏は、2020年の東京オリンピックにブルキナファソ代表をアフリカ大陸代表として出場させることを目標に、選手強化を進めている。オリンピック出場を目指す過程のなかで、活躍したブルキナファソの選手を、日本野球機構所属のプロ野球選手にすることを目指している。今後は独立リーグのプロ選手を目指すだけでなく、道内の大学や高校への留学という形で野球を続ける道を模索していくそうである。またブルキナファソでの野球普及の拠点として、日本の外務省から支援を受けて、簡易グラウンドを建設する計画も進めている。

さらに、出合氏は、ブルキナファソ出身のプロ野球選手の輩出にとどまらず、2022年以降「デベロッパー・プロジェクト」として、様々な分野（スポーツ、音楽、車、電化製品、食品加工、建築、エコロジーなど）で子どもを日本に派遣し、研修を行う計画を進める予定である。さらに、2025年には、ブルキナファソのインフラ整備、学校、医療、労働現場の改善を進める計画がある。出合氏が作成した、「僕たちの夢がみんなの夢になる」という文書には、このような活動が続ける理由が次のように説明されている。

私たちは最貧国といわれるブルキナファソで誰もが平等に夢に挑戦できる社会を築くことを目的に活動しています。そのためのきっかけづくりとして、青年たちと野球を通じて夢の階段づくりをしています。

す。誰もが夢を描いたとき、最初は小さな一歩でも、それが少しずつ実現に向けて進みだしたら、希望を持ち、困難に打ち勝つ強い意思を持つようになります。自分たちで課題を解決し、社会を豊かにすることができます。私たちは、夢の力で彼らの社会問題を解決します。

こうした活動を行う理由は、ブルキナファソの一般の子どもが日本人のように様々な夢を持つことができずに、最初から諦めてしまう状況を変えたいという思いからであった。

## V. 結 論

出合氏は、ブルキナファソの少年に野球指導をするなかで、少年自身が将来日本でプロ野球選手になりたいという夢を持ったために、支援することになった。さらに、出合氏は、2年間青年海外協力隊を経験することを通して、人生観や野球観を相対的に見つめ直し、ブルキナファソ青年のプロ野球挑戦を支援することに生きがいを見出すようになった。誰もが出合氏のように青年海外協力隊員になり、現地で指導した選手を日本に招くことができる訳ではないが、このような国際交流事業を通して、日本人の指導者のスポーツ観を見つめ直し、日本のスポーツ現場の指導を豊かなものにする機会になることが期待される。

## 参考文献

- ブルーマー, H.; 後藤将之訳 (1991) シンボリック相互作用論. 勁草書房.
- 波多野敬雄 (1996) この一冊で世界の国がわかる. 三笠書房, pp.372-373.
- Houlinan, B., and White, A. (2002) The Politics of sports development : development of sport or development through sport?. Routledge.
- 小林勉 (2014) 「国際開発とスポーツ援助—スポーツ援助の動向と課題」 スポーツ社会学研究, 22 (1), 66-78.
- 岡田千あき (2014) サッカーボールひとつで社会を変えろ. 大阪大学出版会.
- 齊藤一彦・岡田千あき・鈴木直文 (2015) スポーツと国際協力—スポーツに秘められた豊かな可能性. 大修館書店.
- 桜井厚 (2002) インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方. せりか書房.
- 鈴木直文 (2011) 「スポーツと開発」をめぐる諸問題—実行組織としてのNGOに関する包括的研究に向けて—, 一橋大学スポーツ研究, 30 : 15-22.

注

- 1) 本研究では、出合氏から実名で調査結果を公表する許可を得た。
- 2) JICA ボランティアホームページ：JICA ボランティア「知られざるストーリー」  
(<http://www.jica.go.jp/volunteer/outline/story/06/index.html>)
- 3) 波多野 (1996) を参照。外務省のホームページ  
(<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/burkina/data.html>) を参照。
- 4) 外務省のホームページにあるブルキナファソへの無償資金協力に関するサイト  
[http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/data/gaiyou/odaproject/africa/burkina/index\\_01.html](http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/data/gaiyou/odaproject/africa/burkina/index_01.html)  
を参照。
- 5) 2016年3月31日の時点で目標金額の350万円を突破し、381万5000円の支援を得ていた。Ready for ? のホームページアドレスは、以下の通りである  
(<https://readyfor.jp/projects/Burkina>)。)

〔平成28年4月20日 受付〕  
〔平成28年7月4日 受理〕